

【論文】

H. G. ウェルズの *The War of the Worlds* における 音と世界

芦田川 祐 子*

Sounds and Worlds in H. G. Wells's *The War of the Worlds*

ASHITAGAWA, Yuko

要約：本論文は、ウェルズの *The War of the Worlds* について、どのような諸世界の戦いが描かれているのかを、作品内に響く音を手がかりに考察する。火星人の立てる音は他者性が強調され、生身の軟らかい音もあるが、大部分は機械音で、生身と機械が一体化した存在として認識されることが多い。地球側を特徴づける音としては人声や車輪の音があるが、音声で意思疎通をする点では火星と必ずしも対立していない。火星人は武器を駆使して地球の音を圧倒し、死の静寂をもたらすが、バクテリアに敗れて自らも沈黙する。一方で火星人到着から侵略、死滅までを目撃する語り手の中でも世界の衝突が起きており、火星人に接近して音と沈黙、生と死の世界のせめぎ合いを体験した語り手は、現在の世界に過去と未来を重ねて見るようになる。こうして新たな世界の見方を獲得した語り手も、人間の限界を超えることはなく、それ故に世界の衝突が続くであろうことが示唆される。

キーワード：H. G. ウェルズ 宇宙戦争 音 語りの技法 他者性

1. はじめに

H. G. ウェルズの *The War of the Worlds* は、日本語の訳題では『宇宙戦争』として知られているが、原題が示唆するのは、地球と火星という惑星同士

* あした がわ ゆうこ 文教大学文学部英米語英米文学科

の戦いに限定されない、異なる「世界」の衝突である。これらはどのような世界であり、その戦いはどのような意味を持つのだろうか。脳と機械の発達で身体が退化した火星人が、戦闘技術で地球人を圧倒しながら地球の細菌によって滅びるという皮肉を考えると、科学技術や進化論、植民地主義との関係は無視することができず、こうしたテーマはこれまでも論じられている (Hughes 31-34)。このような点を踏まえつつ、本論文では特にテキストに響く「音」を手がかりに読み直し、どのような「世界」が構築されているかを考察する。*The War of the Worlds* を音楽化したジェフ・ウェインが“*The War of the Worlds* was the first story I read that excited me as a musician. After just one reading I could already hear ‘sound’” (Brooks 9) と述べているように、ウェルズの文章には感覚に訴える要素が多い。色彩や視覚効果に着目した考察は既にある (Stover 103-05, n.54-55) が、音や聴覚に焦点を当てることで、火星人をはじめとする他者の描き方や「世界と世界の戦い」についての解釈を改めて考えたい。

2. 火星人の音

火星人の立てる音は、金属的な機械音と軟らかい生身の音の2つに大別されるが、初めはどちらともわからない “a stirring noise” (57) や “faint movements” (57) と形容される。¹⁾ 円筒形の物体が落下し、天文学者オグルヴィーが独りでそれを発見した時点では、“A stirring noise within its cylinder he ascribed to the unequal cooling of its surface; for at that time it had not occurred to him that it might be hollow” (57) というように、中に生物がいることさえ予想されていない。ここでは過去の出来事を回想する物語の語り手が、自分の体験としてではなくオグルヴィーの視点から語っているため、いわば1枚膜を通した記述になるが、当時のオグルヴィーには知られていないその円筒の中身が、語り手にはわかっていることも示唆されている。すなわちオグルヴィーに金属の冷える音として聞こえるものは、同時に円筒内の火星人が立てる音としても提示されているのだ。

オグルヴィーが円筒を発見した時、周囲は静かで、“He did not remember hearing any birds that morning, there was certainly no breeze stirring, and the only sounds were the faint movements from within the cindery cylinder” (57) と、円筒から響く音の存在感が強調されている。鳥が鳴かずそよとも風が吹かないのは、不吉な死の静けさの予兆かと思われる。静寂の中、蓋が開き始めるとともに円筒に付着した灰の塊が落ちて大きな音を立て、オグルヴィーをぎょっとさせる (57)。やがて噂を聞きつけた野次馬や語り手も現場に到着し、語り手の体験としての語りが始まる。オグルヴィーから語り手が聞いたところによると、円筒の中の音はまだ時々聞こえるが、人力で外から蓋を開ける試みは失敗した。“The case appeared to be enormously thick, and it was possible that the faint sounds we heard represented a noisy tumult in the interior” (61) というように、外に聞こえるのは微かな音だが、中では大きいかもしれないという、不明である不気味さが漂う。

やがて円筒の蓋が開いて地響きとともに砂利に落ち、生身の火星人が姿を現す。代名詞が“it”であるように他者性の具現化された存在とも言うべきもので、触手のある「怪物」と呼ばれ、“Even at this first encounter, this first glimpse, I was overcome with disgust and dread” (63) と語り手に恐怖と嫌悪感を催させる姿で不器用に動いて、鈍い音を立てる。

Suddenly the monster vanished. It had toppled over the brim of the cylinder and fallen into the pit, with a thud like the fall of a great mass of leather. I heard it give a peculiar thick cry, and forthwith another of these creatures appeared darkly in the deep shadow of the aperture. (64)

ここで興味深いのは、火星人が地面に落ちた音が大きな「革」の塊にたとえられていることである。落ちる前にも光を浴びて“wet leather” (63) のように光るという描写があるが、革は動物に由来する加工品で、生物と無生物の狭間にあると言える。「革」になる前の動物の皮は骨や血肉を包んでいるが、全身が「革」の塊の生物は地球上に存在せず、この火星人の異様さを明示している。火星人のあげる「奇妙な濁った叫び」は、落ちた驚き

かもしれないし仲間への呼びかけかもしれないが、「革」よりは生物らしさを感じさせるため、火星人の分類のしにくさを増幅させて、いっそう不気味な存在として描いている。

このように火星人は到着後に生身の姿を見せるが、その後は「機械」を操る存在として認識されることが多くなる。オグルヴィーをはじめ近寄る人間たちを熱線で焼き殺しながら、穴の中でガンガン音を立て、妖しい緑の煙を上げて、“They seemed busy in their pit, and there was a sound of hammering and an almost continuous streamer of smoke. Apparently they were busy getting ready for a struggle” (79) と、戦いに備える様子である。ここで組み立てられていたのは三脚の「戦闘機械」(fighting-machine)であることが後に判明する。また物語の第2部で、語り手が副牧師とともに閉じ込められた家の外では、“Outside there began a metallic hammering, then a violent hooting, and then again, after a quiet interval, a hissing like the hissing of an engine” (146) と、工場のような音を響かせて、火星人たちが機械で穴を掘ったりアルミニウムを製造したりする。

戦闘機械や火星人の来襲は、しばしば「雷」と結びつけられている。例えば3つめの円筒が緑に光りながら落ちてきた時は、“Close on its apparition, and blindingly violet by contrast, danced out the first lightning of the gathering storm, and the thunder burst like a rocket overhead” (83) と、ほぼ同時に青紫の稲光が走り、雷鳴が轟く。嵐の只中では、“The thunder-claps, treading one on the heels of another and with a strange crackling accompaniment, sounded more like the working of a gigantic electric machine than the usual detonating reverberations” (83) という具合に、雷の音が巨大な電動機械のようだと言われ、普段と異なる様相を呈しているのがわかる。語り手はこの奇妙な嵐の中、跋扈する火星人の戦闘機械を目撃する。

A monstrous tripod, higher than many houses, striding over the young pine-trees, and smashing them aside in its career; a walking engine of glittering metal, striding now across the heather; articulate ropes of steel dangling from

it, and the clattering tumult of its passage mingling with the riot of the thunder. (84)

この三脚の戦闘機械は、機械でありながら頭や手足がある生き物のように見え、生身の火星人間様に“monster” (84) とも形容される。ここで戦闘機械の立てる金属音は、雷の轟きと混じり合い、騒ぎをより大きくしている。雷は天から降ってくるものであり、一瞬の光とともに大きな音とエネルギーを発する。戦闘機械に大砲で応戦しようとしている軍隊を見て、ある砲兵が“It’s bows and arrows against the lightening” (95) と述べるように、雷も火星人の機械も人間にはコントロールできないが、一定の時間がたてば嵐は去るものでもあり、火星人の運命を暗示しているとも言える。また、物語の第1部の終わりで“Thunder Child”という名の軍艦が火星人の戦闘機械を2体倒すのは、一種の親殺しにあたり、世界が永久に変わってしまうことを示唆している。

火星人は機械との関連が深く、戦闘機械の他に「作業機械」(handling-machine) も作って操る。作業機械については、“It seemed infinitely more alive than the actual Martians lying beyond it in the sunset light, panting, stirring ineffectual tentacles, and moving feebly after their vast journey across space” (153) と、きびきびした機械の動きと鈍重な火星人が対比された記述もあるが、実際は作業機械の中には火星人が入っていて、ほぼ一体化した存在として認識されている。例えば物語の第2部で、語り手が副牧師を殴り倒した後、作業機械の触手が様子を探りに家に入ってくる場面がある。語り手は身を隠し、触手が動き回って副牧師の体を運び去る音を聞くが、触手は戻ってきてさらに探りを入れてくる。

Then the faint metallic jingle returned. I traced it slowly feeling over the kitchen. Presently I heard it nearer—in the scullery, as I judged. I thought that its length might be insufficient to reach me. I prayed copiously. It passed, scraping faintly across the cellar door. An age of almost intolerable suspense intervened; then I heard it fumbling at the latch. It had found the door! The

Martians understood doors! (160)

ここで語り手は、物音によって火星人の機械の動きを想像するしかない。微かな金属音を立てる触手は“it”で表される物体だが、ドアの仕組みを理解して開けようとする火星人の頭脳とつながっている。火星人と機械の一体化した存在は、知能と意思を持つ音として語り手に近づいたり遠ざかったりしているのだ。

生身の火星人は、地球人の血を吸って栄養を取っているが、その際にホーホーという音を立てる。語り手はある時、人間が運ばれてきて生身の火星人の間に降ろされるのを目撃する。火星人たち姿は物陰にあって見えないが、“for a moment there was silence. And then began a shrieking and a sustained and cheerful hooting from the Martians” (156) と、人間の悲鳴に対して「陽気に続く」ホーホー音が、火星人と人間が全く異質の存在であることを感じさせる。²⁾ 語り手の考察によると、火星人の抑揚のないホーホー音は言語ではなく、“Their peculiar hooting invariably preceded feeding; it had no modulation, and was, I believe, in no sense a signal, but merely the expiration of air preparatory to the suctional operation” (152) ということ、ある意味で機械的な生理現象と解釈されている。語り手によれば、火星人同士が音や触手の動きで意思疎通を図るという説は誤りで、テレパシーのように“the Martians interchanged thoughts without any physical intermediation” (152) だという。しかしながら、戦闘機械の描写では、音を発することで交信していると思われる節がある。

These Martians did not advance in a body, but in a line, each perhaps a mile and a half from his nearest fellow. They communicated with one another by means of siren-like howls, running up and down the scale from one note to another. (115)

ここで「火星人」や「彼ら」と呼ばれているのは火星人が入っている戦闘機械であり、サイレンのように上下する音を立てるのも、生身の火星人ではなく機械だと思われる。このように火星人は、時に機械そのものとして表

現されるのが大きな特徴である。

生身にしろ機械にしろ、火星人の発する音は英語に翻訳されるような言語としては捉えられていないが、何らかの意味や機能を持つものとして解釈されている。特に印象的なのは戦闘機械のあげる叫びである。先に引用した嵐の中で語り手の傍を通った戦闘機械は、“As it passed it set up an exultant deafening howl that drowned the thunder—‘Aloo! aloo!’” (85) と、謎の咆哮を発する。この直後に仲間と合流して第3の円筒の落下地点へ行くので、喜びの「アルー！」だと思われる。逆に仲間の助けを呼ぶこともあり、人間の砲撃を受けた際、“The shells flashed all round him, and he was seen to advance a few paces, stagger, and go down. [. . .] The overthrown Martian set up a prolonged ululation, and immediately a second glittering giant, answering him, appeared over the trees to the south” (116) と、悲しげな声をあげている。ここでは主語が“it”ではなく“he/Martian”だが、倒れたのも呼ばれて姿を現したのも戦闘機械であり、機械同士の交信と見てよいだろう。

この“ululation”は、最後にバクテリアの犠牲となった火星人・戦闘機械がロンドンであげる“ulla”という叫びの予兆として響く。「ウラー」は「アルー」を逆にした音であり、Stoverによるとアイルランドの哀歌“Ullaloo”などに関連を見出せる(Stover 237, n.176)。「アルー」は2回の叫びが1度きりだったが、「ウラー」は必ず4回連なったものが7度引用され、単調に流れ続けていることが暗示される。語り手は副牧師の死後、火星人の気配のなくなった町を出て、ロンドン中心部へ向かう中でその声を耳にする。

It was near South Kensington that I first heard the howling. It crept almost imperceptibly upon my senses. It was a sobbing alternation of two notes, “Ulla, ulla, ulla, ulla,” keeping on perpetually. [. . .] I stopped, staring towards Kensington Gardens, wondering at this strange, remote wailing. It was as if that mighty desert of houses had found a voice for its fear and solitude. (181)

「ウラー」という他者なる火星人のむせび泣きは、語り手の中にしみこん

でくるとともに、荒廃した家々が発する声のようにも感じられる。非人間的な音であることが強調され、“‘Ulla, ulla, ulla, ulla,’ wailed that superhuman note—great waves of sound sweeping down the broad, sunlit roadway, between the tall buildings on each side” (181) と、虚ろな道路や建物の空隙を埋めるかのように「波」として視覚化される。

語り手はその音に近づきながら、悲しげな叫びに取りつかれていく。

“Ulla, ulla, ulla, ulla,” cried the voice, coming, as it seemed to me, from the district about Regent’s Park. The desolating cry worked upon my mind. The mood that had sustained me passed. The wailing took possession of me. I found I was intensely weary, footsore, and now again hungry and thirsty. (181-82)

音源は見えないが、語り手はその叫びを内面化しており、心の疲れと孤独感を覚えている。「ウラー」という悲しげな叫びの繰り返しは、この作品を地球人ではなく火星人の悲劇の物語として印象づけると言う批評家もいる (Hughes 223, n.4) が、その声に呼ばれた語り手もまた、救いを必要とする存在である。

やっと見えた音源は火星人の戦闘機械であり、語り手は恐怖も感じずに近づいていく。“I tried to formulate a plan of action. That perpetual sound of ‘Ulla, ulla, ulla, ulla,’ confused my mind. Perhaps I was too tired to be very fearful. Certainly I was more curious to know the reason of this monotonous crying than afraid” (182) というように、「ウラー」という声が思考の大部分を占めている。語り手は途中で赤い肉をくわえた犬とそれを追う犬の一団に遭遇し、ありふれた地球の生き物の吠え声に注意を向けるが、“As the yelping died away down the silent road, the wailing sound of ‘Ulla, ulla, ulla, ulla,’ reasserted itself” (182) と、再び「ウラー」が鮮やかに響く。後にこの「ウラー」が火星人・戦闘機械の死にゆく叫びであったことが判明し、“The one had died, even as it had been crying to its companions; perhaps it was the last to die, and its voice had gone on perpetually until the force of its machinery was exhausted”

(185)と述べられる。生身の火星人が死んだ後も機械は動くが、その機械もいつかは止まる時がくるのだ。他者であった火星入・機械は、死に際して語り手と近い存在になっている。³⁾

3. 地球の音

火星入の機械的な音と対比して、地球では平和な時も混乱中も、人の声や交通手段の音がよく描写される。初めて火星入が熱線で人を焼き殺すのを見て、ほうほうの体で逃げ帰った語り手は、先ほど目にした光景と日常の平和な情景の落差を感じる。

Over the Maybury arch a train, a billowing tumult of white, firelit smoke, and a long caterpillar of lighted windows, went flying south—clatter, clatter, clap, rap, and it had gone. A dim group of people talked in the gate of one of the houses in the pretty little row of gables that was called Oriental Terrace. It was all so real and so familiar. (72)

ここでは汽車のガタンゴトン通り過ぎる音や、人々のおしゃべりが、現実的で親しみのあるものとして描かれている。汽車が人や貨物を乗せていることには触れられず、それ自体が「イモムシ」という生き物になぞらえられるなど、人間と機械は別の物として認識されている。

鉄道のほか、地球人の移動の手段は馬車や荷車である。これらを動かす「車輪」は、火星入の機械には見当たらず、“And of their appliances, perhaps nothing is more wonderful to a man than the curious fact that what is the dominant feature of almost all human devices in mechanism is absent—the *wheel* is absent” (152-53) とあるように、人間らしさの象徴になっている。ロンドンで語り手の弟が遭遇する避難民たちの騒ぎも、“The tumultuous noise resolved itself now into the disorderly mingling of many voices, the gride of many wheels, the creaking of waggons, and the staccato of hoofs” (125) と、火星入やその機械が出さない種類の音で成り立っている。⁴⁾ 車輪を使わない火星入が避けたものが、回転して元の位置に戻る繰り返しの概念だったとすれば、火星

人が地球生物の進化の過程を考慮せずに「下等」なバクテリアに倒されるのは、いっそう皮肉である。

馬車を引く馬に加えて、動物では犬や鳥がたびたび登場する。語り手が妻を逃がすために馬車を借りに行くバブが“Spotted Dog” (80) という名であるのも、犬の日常性の表れだと言えよう。犬も鳥も人間にとって身近な存在で、その鳴き声や動作音は耳慣れているはずだが、物語中では何か異様な出来事に注意を向けさせる働きをしている。火星人が現れる朝に鳥の声がしなかったり (57)、犬が吠えるのに続いて砲撃音が聞こえたり (157) ということがあり、語り手が閉じ込められていた家を脱出するのも、犬や鳥の音がきっかけになる。

It was early on the fifteenth day that I heard a curious, familiar sequence of sounds in the kitchen, and, listening, identified it as the snuffing and scratching of a dog. Going into the kitchen, I saw a dog's nose peering in through a break among the ruddy fronds. This greatly surprised me. At the scent of me he barked shortly. (163)

この犬は“it”ではなく“he”で表されるが、犬の嗅ぎまわる音がなじみのあるものでありながら「奇妙」に聞こえたのは、外で火星人が立てる機械音に慣れていたのと、ここ数日はその機械音も止んで、耳が聞こえなくなっただかと思う静けさが続いていたためであろう。語り手はまだ火星人が家の外にいと信じているので、犬の立てる音で自分が火星人に見つかる前に犬を殺そう（あわよくば食べよう）と考えるが、犬は行ってしまう。その後、語り手はさらに耳を澄ませ、“I listened—I was not deaf—but certainly the pit was still. I heard a sound like the flutter of a bird's wings, and a hoarse croaking, but that was all” (163) と、火星人の音ではなく鳥の羽ばたきや鳴き声を聞く。犬や鳥の音が励みになって外に出てみると、火星人は死んでいて、犬やカラスに死肉を食われているという展開になる。火星人は死んでしまえばただの肉であり、犬や鳥にとっては地球の動物の肉と変わりがないのである。

地球の生活音では、人や乗り物の音とともに、教会の鐘の音も響く。火

星人からの避難がまださほど切迫していなかったある日曜日、語り手は荷造りする人々や興奮する子どもたちを目にし、“In the midst of it all the worthy vicar was very pluckily holding an early celebration, and his bell was jangling out above the excitement” (95) と、混乱の中でも日常を保とうとする聖職者が描かれる。しかしこれらの乗り物や宗教は、火星人が猛威を振るっている時は助けにならず、人間はアリのように蹴散らされる。人造の武器はとも火星人の機械や毒ガスに対抗できるものではなく、戦いの際に人々があげる叫び声や砲撃音は空しく響く。語り手が偶然再会した砲兵に言わせると、火星人とはいかに戦いにならず、“It never was a war, any more than there’s war between men and ants” (171) と、力の差が歴然としている。

こうしていったんは火星人の機械音が地球人の音を圧倒するが、火星人が死滅して静寂が訪れた後は、地球の生活音が戻ってくる。

Already men, weeping with joy, as I have heard, shouting and staying their work to shake hands and shout, were making up trains, even as near as Crewe, to descend upon London. The church bells that had ceased a fortnight since suddenly caught the news, until all England was bell-ringing. Men on cycles, lean-faced, unkempt, scorched along every country lane shouting of unhoped deliverance, shouting to gaunt, staring figures of despair. (187)

人の叫び声や汽車、教会の鐘、自転車の音で国中が活気づいて、復興の兆しが見える。ここでは“shout”という語が4回使われていて、大声で喜びの爆発を示すとともに、言語で意思疎通をする人間の特質が前景化されている。火星人は声で合図を交わすことはあっても話し言葉は必要としないようだったが、地球人は言葉にしないと「思わぬ救い」が訪れたことを伝えられないのだ。

とはいえ、地球人は言語で互いに全てを伝達できているわけではない。火星人の攻撃を見た後、語り手は何も知らない近所の人々に事件を話そうとするが、“I felt foolish and angry. I tried and found I could not tell them what I had seen. They laughed again at my broken sentences” (72) と、文章を組み

立てて伝えることができない。加えて言葉には、他人に伝えるためではないような謔言や独り言もある。語り手自身が火星人の死滅を見た後は3日間記憶をなくし、発見して保護してくれた人々の話で“*They have told me since that I was singing some inane doggerel about ‘The Last Man Left Alive! Hurrah! The Last Man Left Alive!’*” (187) と聞くように、狂気の出が言葉になる場合もあるのだ。語り手にとって人声がすべて好ましいものというわけではなく、特に相容れない他者的存在である副牧師の独り言や泣き声は、“*His endless muttering monologue vitiated every effort I made to think out a line of action, and drove me at times, thus pent up and intensified, almost to the verge of craziness*” (154) というように、語り手の思考を邪魔して苛立たせる。また第2部の7章で再会した砲兵は、火星人に対抗する計画を力強い言葉で披露するが、行動が伴わないため語り手を失望させる。このように、過不足のある言葉は問題を引き起こすことが示されている。

語り手は火星人はテレパシーで交信するという説を唱えたが、妻との再会の場面では、自身も言葉を介さずに妻と心が通じているように見える。妻は死んだものと思って自宅を訪れた語り手は、外の人声に驚かされる。

And then a strange thing occurred. “It is no use,” said a voice. “The house is deserted. No one has been here these ten days. Do not stay here to torment yourself. No one escaped but you.”

I was startled. Had I spoken my thought aloud? [...]

And there, amazed and afraid, even as I stood amazed and afraid, were my cousin and my wife—my wife white and tearless. She gave a faint cry.

“I came,” she said. “I knew—knew—” (190)

まさに自分が考えていたことを、いとこが口にしていたのだ。妻も「知っていて」来たというのは、夫に会えると思っていたのだろうが、ここでは妻の台詞の続きは必要とされない。「驚き恐れた」語り手と、「驚き恐れた」妻およびいとこは、互いを映す鏡のように描かれている。火星人の「ウラー」の洗礼を浴びた後であるせいかもしれないが、語り手はそうとは知らずに

妻と示し合わせて自宅に来たことになり、これは地球人には珍しい現象であろう。火星人と地球人の使う道具の音はかなり異なるが、言語や声に関しては、いくらか共通する部分もあることがわかる。

4. 静けさ

ここまで火星人と地球人の音に焦点を当てて世界の様相を考えてきたが、音のない状態も、音と同じくらい大切である。*The War of the Worlds*において、静けさは多様な意味を持っている。ここではそれらの沈黙が、世界と世界の戦いでどのような役割を果たしているかを考察する。

まずたびたび描かれるのは、戦いの前の静けさである。

There was not a breath of wind this morning, and everything was strangely still. Even the birds were hushed, and as we hurried along I and the artilleryman talked in whispers and looked now and again over our shoulders. Once or twice we stopped to listen. (93)

火星人が姿を見せた朝のように、風のそよぎも鳥の声もないのが、不安をかきたてる。語り手も砲兵も、前日に雷雨の中で火星人の戦闘機械の威力を見知っていて、万が一にも見つからないように声を潜めている。この後、人間の軍隊と火星人の戦闘機械が本格的に衝突し、先の沈黙とは対照的に“The air was full of sound, a deafening and confusing conflict of noises—the clangorous din of the Martians, the crash of falling houses, the thud of trees, fences, sheds flashing into flame, and the crackling and roaring of fire” (99) と、うるさすぎて耳が聞こえなくなるほど、多くの騒音が入り乱れる。

また別の時は、それまで続いていた火星人の合図音が止んで、戦いの始まりを示唆する。砲兵隊が並ぶ中、“The occasional howling of the Martians had ceased; they took up their positions in the huge crescent about their cylinders in absolute silence. [...] Never since the devising of gunpowder was the beginning of a battle so still” (116-17) と、近代的な兵器を使う戦争では、緊張しているものの最も静かな始まりであることが強調される。そしてこの時

は、戦い自体も比較的静かである。火星人が黒い毒ガスが出る弾を炸裂させると、“Everything had suddenly become very still. Far away to the south-east, marking the quiet, we heard the Martians hooting to one another, and then the air quivered again with the distant thud of their guns. But the earthly artillery made no reply” (118) というように、地球の軍隊は応戦する隙もなく滅びるのだ。軍隊の音はせず、主導権を完全に火星人に握られているのがわかる。

火星人の圧倒的な力がもたらす死の沈黙は、語り手に恐怖を引き起こす。火星人が到着した後、熱線で人々が焼き殺されるのを初めて見た語り手は、“The fear I felt was no rational fear, but a panic terror not only of the Martians but of the dusk and stillness all about me. Such an extraordinary effect in unmanning me it had that I ran weeping silently as a child might do” (68) と、恐ろしさに泣きながら逃げ出す。火星人だけが怖いのではなく、薄闇と静寂にも感じる「理性でコントロールできない」恐怖は、語り手の「男らしさ」を失わせ、「子ども」に退化させてしまう。パニックを起こさせたのは、普段は抑えている、死に対する根源的な恐怖とでも言おうか。この生と死のせめぎ合いは、火星人ととの戦いをきっかけに語り手の中で表面化する、ある種の世界の戦いである。⁵⁾

静かな夜の闇は、語り手に内省を促し、別の要素のせめぎ合いを引き出すものでもある。副牧師を死なせた後、語り手はその過程を思い返して、“In the silence of the night, with that sense of the nearness of God that sometimes comes into the stillness and the darkness, I stood my trial, my only trial, for that moment of wrath and fear” (168) と述べる。ここでは火星人のことは触れられず、ある状況での殺人という犯罪行為が道徳上の罪にあたるかどうかという問題に注意が向けられている。しかしこれは理性でコントロールされた思考の対立で、答えは既に決まっている。人を裁く「神」の存在を感じつつ、語り手に恐怖や後悔はない。

語り手を最も動揺させる静けさは、彼が物語第2部の終盤でさまよう、荒廃したロンドンの状況である。人間をほとんど見かけず、火星人も遭

遇しないまま進む語り手は、“The streets were horribly quiet” (180) と静寂に脅え、家の燃える音にほっとして “absolute relief” (180) を感じる。それは死の静けさというより、“The farther I penetrated into London, the profounder grew the stillness. But it was not so much the stillness of death—it was the stillness of suspense, of expectation” (181) であり、語り手は今にもさらなる破壊が行われるのではないかと予期する。しかしそこで訪れたのは、火星人による攻撃ではなく、「ウラー」という悲しげな呼び声だった。先述のとおり語り手はその声に取りつかれるようにして音源へと向かうのだが、その半ばで「ウラー」は唐突に途切れる。“As I crossed the bridge, the sound of ‘Ulla, ulla, ulla, ulla,’ ceased. It was, as it were, cut off. The silence came like a thunder-clap” (183) と、逆説的ながら「雷のような」静寂が訪れたと形容されている。「ウラー」の叫びが止むことで、語り手は世界の変化を感じ取るのだ。

Night, the mother of fear and mystery, was coming upon me. But while that voice sounded, the solitude, the desolation, had been endurable; by virtue of it London had still seemed alive, and the sense of life about me had upheld me. Then suddenly a change, the passing of something—I knew not what—and then a stillness that could be felt. Nothing but this gaunt quiet. (183)

「恐怖と神秘の母たる夜」も「孤独」も、「ウラー」の響いていた間は耐えられるものであり、その声によってロンドンも語り手自身も生きていた。その声が止んだ今、通常は音のない空虚な状態である静けさが、物質的な存在感をもって迫ってくる。

こうして「ウラー」が途絶えた後の沈黙は、語り手にとって死と闇と幻覚の世界となる。

London about me gazed at me spectrally. The windows in the white houses were like the eye-sockets of skulls. About me my imagination found a thousand noiseless enemies moving. Terror seized me, a horror of my temerity. In front of me the road became pitchy black as though it was tarred, and I saw a

contorted shape lying across the pathway. I could not bring myself to go on.

(183)

街全体や家が死者や亡霊のようにこちらを監視し、暗闇で音を立てない敵がうごめく恐ろしさに耐えかねて、語り手は踵を返して逃げ、少し離れた場所で「夜と静けさ」から隠れて過ごす。火星人の熱線を見て逃げた時のように、理性でコントロールできない死の恐怖に捕らわれているのだ。

しかし夜明け前に語り手は勇気を取り戻し、日の昇る所にプリムローズ・ヒルの上から火星人の死体やロンドンの街を一望する。

And scattered about it, some in their overturned war-machines, some in the now rigid handling-machines, and a dozen of them stark and silent and laid in a row, were the Martians—*dead!*—slain by the putrefactive and disease bacteria against which their systems were unprepared; slain as the red weed was being slain; slain, after all man's devices had failed, by the humblest things that God, in his wisdom, has put upon this earth. (184)

ここでも依然として静寂が続いているが、それは火星から来たものたちにとっての死の静寂へと意味合いが変わっている。生身の火星人も火星の植物も死に絶え、機械はもはや動かない、その原因は地球の「最も下等な」生物の活動にあった。バクテリアへの耐性をつけるよう進化してきた人類に対し、免疫のない火星人は到着した時から細菌感染で死ぬよう宿命づけられていた、というのだ。火星人が人間をたやすく殺す中で、バクテリアは静かに活動し、同じくらいたやすく勝利を収めていた。火星人を滅ぼしたのはバクテリアであり「神の知恵」であり、人間の力ではないが、ここで語り手にとって重要なのは、ロンドンがもはや死の静寂の世界ではなくなったことだ。

And as I looked at this wide expanse of houses and factories and churches, silent and abandoned; as I thought of the multitudinous hopes and efforts, the innumerable hosts of lives that had gone to build this human reef, and of the swift and ruthless destruction that had hung over it all; when I realised that

the shadow had been rolled back, and that men might still live in the streets, and this dear vast dead city of mine be once more alive and powerful, I felt a wave of emotion that was near akin to tears. (186)

眼下に広がるロンドンは静かで人の気配がないが、語り手がそこに見聞しているのは過去の人々が街づくりに注いだ労力であり、破壊から立ち上がる未来の活気にあふれる様子である。火星人の攻撃が終わった沈黙の世界に過去と未来の人間の騒音を聞くことで、語り手の感激は頂点に達している。

5. おわりに

以上のように、*The War of the Worlds* では音や静寂が諸世界を区別するのに重要な役割を果たしており、その世界の区別は特に語り手にとって大きな意味を持っている。ここで避けて通れないのが、語りの「声」の問題である。この作品はしばしば指摘されるように、6年前の出来事を現在の語り手が振り返る二重性の上に立ち、天文学者や語り手の弟など他人の体験について述べた章も入っていて、複数の声や視点が重なっている。語り手は科学の専門家ではなく、伝聞や推測に頼った話をすることがあり、6年前の体験でトラウマを負った存在として、信用性に疑義が呈されることがある (Beck 155-56)。Stover は作者ウェルズがこの無名の語り手と距離を取っていることを強調し、“The two share some ideas but Wells makes it clear that his narrator is a shallower version of himself, a Panglossian simpleton” (Stover 62, n.15) と述べているが、この作品の語りをどのように捉えればよいのだろうか。

語り手は初めの方で、自分が変わり者であるかもしれないと主張する。

Perhaps I am a man of exceptional moods. I do not know how far my experience is common. At times I suffer from the strangest sense of detachment from myself and the world about me; I seem to watch it all from the outside, from somewhere inconceivably remote, out of time, out of space, out of the

stress and tragedy of it all. (72)

この「離れた感じ」は神の視点を示唆するが、語り手は全知の存在ではない。そしてその離れた感じが「奇妙」であるということは自覚している。このように時々一般の人と異なる見方で世界を眺めることは、火星人の来襲を経験する前もあったようだが、結末の記述を見ると、火星人の侵略後により多くなっていると考えられる。語り手は“I must confess the stress and danger of the time have left an abiding sense of doubt and insecurity in my mind” (193) と打ち明け、彼にとって世界の確かさが揺らいでいる様子を次のように描写する。

I go out into the Byfleet Road, and vehicles pass me, a butcher boy in a cart, a cabful of visitors, a workman on a bicycle, children going to school, and suddenly they become vague and unreal, and I hurry again with the artilleryman through the hot, brooding silence. Of a night I see the black powder darkening the silent streets, and the contorted bodies shrouded in that layer; they rise upon me tattered and dog-bitten. They gibber and grow fiercer, paler, uglier, mad distortions of humanity at last, and I wake, cold and wretched, in the darkness of the night. (193)

現在の音が消えて風景が急に「非現実的」に見え、過去の体験がよみがえったり、過去の記憶が悪夢を形作ったりしているのだ。白昼夢も悪夢も、その只中では語り手にとって現実として体験されている。また逆に、現在の光景が「過去の亡霊」に見えることもあるという。

I go to London and see the busy multitudes in Fleet Street and the Strand, and it comes across my mind that they are but the ghosts of the past, haunting the streets that I have seen silent and wretched, going to and fro, phantasms in a dead city, the mockery of life in a galvanised body. And strange, too, it is to stand on Primrose Hill, as I did but a day before writing this last chapter, to see the great province of houses, [. . .] to see the sightseers about the Martian machine that stands there still, to hear the tumult of playing children, and

to recall the time when I saw it all bright and clear-cut, hard and silent, under the dawn of that last great day. . . . (193)

語り手は「あの最後の大いなる日」に火星人の死体を見て死の沈黙に生を見出したように、現在の生き生きしたロンドンに死の世界を見ている。ここでは「この最終章を書く前日」にもプリムローズ・ヒルに登ったという記述が挿入され、書いている現在と前日、火星人の死体を見た日という三層の世界が重なる。語り手の中の「世界と世界の衝突」は終わらない。過去と現在と未来が語り手の世界には混在し、どれもが現実になり得るのだ。

このように、語り手の世界がせめぎ合う状態が語りの不安定感を生み、多様な視点の語りとともにそれぞれの限界が示されることこそ、物事に常に他の視点や解釈がある可能性を前景化する。*The War of the Worlds*の語りの声は、唯一絶対の真実を提示し得ないものとして響くところが意義深い。この作品のテーマとして挙げられる中に人間の傲慢さと無力さがあるが、物語の有名な冒頭から、“No one would have believed in the last years of the nineteenth century that this world was being watched keenly and closely by intelligences greater than man’s and yet as mortal as his own” (51) と、過去には想定外だったが現在は知られている事実があることと、知能が人類に優る生命体が存在し、それらにも人間にも死が待っていることが暗示される。人間が微生物を観察するように過去に火星人たち人間を観察しており、ある時点まで人間はそれに気づいていなかったということを、語り手は既に知っていて、“With infinite complacency men went to and fro over this globe about their little affairs” (51) と、見ている側が他から見られていることに気づかない様子を「自己満足」と批判的に表現している。語り手は“*It is curious to recall some of the mental habits of those departed days*” (51) と続け、火星人の来襲を経て人類の視野が広がったことを評価して、無知の状態を過去のものとしているが、これこそ「自己満足」ではなかろうか。世界と世界の戦いを経験した語り手は、過去に持っていたのとは異なる世界観を身につけた一方、全てを知ることはできず自分の限界も見ることができな

い、死すべき人間として構築されている。その意味で *The War of the Worlds* の語りは人間一般と同じように信用でき、人間一般と同じように信用できない、傲慢で無力なものである。それはまた、常に限界があるが故に、新たな世界の衝突と別の世界観が生まれ続けることを示唆してもいるのだ。

注

- 1) 本論文において、引用文で著者名の表記がないものは Wells の *The War of the Worlds* 原文からの引用であり、ページ番号は Atlantic edition (1924) に基づく Hughes and Geduld の注釈本 *A Critical Edition of The War of the Worlds* による。
- 2) ただし、捕食という行為自体は人間もするものであり、語り手は火星人の吸血行為について、“The bare idea of this is no doubt horribly repulsive to us, but at the same time I think that we should remember how repulsive our carnivorous habits would seem to an intelligent rabbit” (150) と付け加え、吸血をおぞましいと思うかどうかは立場によると示唆している。火星人は語り手にとって、地球で生きる “birthright” (184) を持たない侵略者だが、“Surely, if we have learned nothing else, this war has taught us pity—pity for those witless souls that suffer our dominion” (169) と、人間としての自己の行為を省みさせる存在でもある。火星人と人間の関係は、作中でしばしば人間とウサギやアリやネズミなどの動物の関係になぞらえられている (Hughes 220, n.1)。そこには知性と力の差が存在し、語り手は “we men, the creatures who inhabit this earth, must be to them [the inhabitants of Mars] at least as alien and lowly as are the monkeys and lemurs to us” (52) と述べて、火星人が人間を蹂躪したように、人間が他の下等とされる動物および人類の “inferior races” (52) に暴虐を働いてきたことを思い出させる。その意味では火星人も地球人も同じことをしており、片方が責められるならもう片方も責められるべきであるが、両者が同胞として出会うことはない。語り手はこれらの上下関係を理解しており、火星人を一方的な悪とは決めつけないものの、現人類を “we” と呼ぶ一員の立場から種の壁は超えずに語り、火星人や動物を “they” で表している。
- 3) 語り手は “something very like the war-fever” (82) から興奮して戦闘を観察したり、事故により火星人の近くで過ごさねばならなくなったりした結果、“Now no surviving human being saw so much of the Martians in action as I did” (152) と、誰よりも近くで火星人を観察し、理解している人間だと自負している。火星人を描写する際には “the most unearthly creatures” (149) や “these offensive creatures” (150) などと他者性を強調する一方で、“To me it is quite credible that the Martians may be descended from beings not unlike ourselves” (151) と、脳と手が極度に発達した人類の将来の姿を火星人に見てもいる。冒頭で火星人を “intelligences greater than man’s and yet as mortal as his own” (51) と呼ぶように、両者の共通点として強調されるのが「死」である。
- 4) 人間的な音が全て好ましいものであるわけではない。避難民の地獄のような騒ぎでは、車輪でひき殺される者も出て、人間の敵となり得るのは火星人だけではなく

- く他の人間でもあることを示す。
- 5) 副牧師の死にもこの戦いが関係している。副牧師は人間でありながら、語り手にとって“we had absolutely incompatible dispositions and habits of thought and action” (154) と描かれる他者であり、“Practically he had already sunk to the level of an animal” (157) と人間以下に退化した存在とされる。語り手は副牧師とともに閉じ込められた状態を“‘It sounds paradoxical, but I am inclined to think that the weakness and insanity of the curate warned me, braced me, and kept me a sane man’” (159) と回想し、宗教にも救われず死の恐怖に屈して理性を失った副牧師を反面教師としつつ死の世界に送ることで、自らが助かったことを暗示している。

引用文献

- Beck, Peter J. *The War of the Worlds: From H. G. Wells to Orson Welles, Jeff Wayne, Steven Spielberg and Beyond*. London: Bloomsbury Academic, 2016.
- Brooks, Greg and Jeff Wayne. *Jeff Wayne's Musical Version of The War of the Worlds: The Story*. 2018年4月10日アクセス。
<http://www.thewaroftheworlds.com/thestory/default.aspx>
- Hughes, David Y. and Harry M. Geduld, eds. *A Critical Edition of The War of the Worlds: H. G. Wells's Scientific Romance*. Bloomington: Indiana University Press, 1993.
- Stover, Leon, ed. *The War of the Worlds: A Critical Text of the 1898 London First Edition, with an Introduction, Illustrations and Appendices*. Jefferson: McFarland, 2012.